

[II-D] 解答例

問1

「行動に際して、確かなものに依拠できない状況。」など（単に「不確実性」でも可）。

問2

(i) 君が「第二の格率」を信奉しているのなら、いったん結婚のときにした決断を容易く反古にすべきではなく、それを堅持して結婚生活を続けるべきであろう。些細な理由によって新しい生活に幸福を追求しても、それを再び同様に瑣末な理由から後悔することも起こりうるだろう。そもそも何かを決断するということは、その決断を堅持するということを含意するのであり、結婚するということはそれを末永く維持するという決断も含むのだ。

(ii) (反論)

「第二の格率」で、一旦決めて堅持しようとした意見として、どのような内容を理解するかによるだろう。君はそれを「結婚生活の維持」と考えているようだが、実際には私の場合、堅持すべき内容はたとえば「幸福の追求」かもしれない。その場合、結婚したこともこの志に合致するし、不幸な結婚生活を速やかに清算することもまた、この志に合致する。どちらの場合にも、私としてはこの志を堅持し、「第二の格率」に矛盾していない。

問3

(i) 「(森の中よりはましな) どこか (森の外) にたどりつく」——「その問題の解決が得られる。」(「課題の首尾よい達成」、「解決」、「達成」なども可)

(ii) 「彼らの望むであろうその場所には行けなくとも、少なくとも最後にはどこかにたどりつく」——「必ずしも最適とは言えないにせよ、解決とは言えるものが複数存在すること。」

(iii) 「同じ方向」——「同じ方法」「同じ方針」「同じ原則」など

問4

「森はその外部によって圍繞されている。」

「森はどちらの方向にも有限である。」

「森から出れば見通しがよく、したがって道が容易に見つけられる。」

「森の中では見通しが悪いため、道を道以外のところから見つけることが困難である。」

「我々は自分がまっすぐに進んでいるか否かについて、容易に自覚できる。」

「森から出ようとするわれわれの歩みが、その行為自体によって森の有様を変えたり、森を増殖させることはない。」

「森の中にとどまるより、外に出ることが望ましい。」

など

(ここで、適切と思われる条件を挙げた数に応じて、三つまで加点するのがよい。不適切な解答は、減点しない。)

問5

(解答例1)

「森」で表わされる問題が、それを解決しようとしている主体と独立に存在すると考えられるような場合には、方法の一貫性ということが問題解決にとって有効かもしれない。当初のもくろみは達成できなくても、それ自体新しい認識をもたらすからである。しかし、問題と主体とのこのような関係が常に成立するとは限らない。

問題の存在が主体の行動によって大きく影響を受けるような場合、ないしは探求する主体の内部に問題がある場合、問題を解こうとして、かえってますます問題を複雑化させたり、増大させたりする場合もないとは言えない。たとえば、人間関係などにおいて、相手に対する信頼が揺らいだとき、その疑惑がさらに相手からの不信を招き、さらに人間関係を悪化させる時もある。また経済社会においては、特定の物資が欠乏しているかどうかを気にして予防し備蓄しようとする、かえってますます市場全体でその物資が欠乏してしまうなどということも起こり得る。

(解答例2)

B文において「同じ方向」ということが自覚できたり、明確な意味を持つ場合には、つまり「行動の一貫性」に実質的な意味がある場合には、たとえその方向が失敗に終わろうとも、それをすることが失敗をもたらすという認識を生み出すという意味で、何らかの出発点にはなり得る。そのいみで「森から出る」手がかりとはなるわけだ。しかし、このように「同じ方向」がそれ自体で自明に主体に自覚できるという前提は、無条件には成り立たない。

たとえば、わからないことがあったときには占いで決めるとか、サイコロを振って決めるという「一貫した方針」を決めたとする場合、それで「同じ方向」を決めたと言えるだろうか？ ここには「同じ方向」と言える実質がない。一步ごとにサイコロを振って方向を決めるようなもので、これでは「森から出られる」という保証も、「よりよい場所にたどり着く」という保証もない。それゆえ、「同じ方向」に実質的意味を与えられる場合と、空虚な意味しか与えられない場合とを区別する基準が与えられなければ、「第二の格率」は有効とは言えないだろう。

問6

問5で答えたように、AとBとで共通しているのは、不確かな状況下でどう行動すべきかが問題となっている、ということであった。森の中では、どちらへ行けば最短で脱出できるのかわからないまま行動し始めなければならない、平生の生活でも同様である。そこで

筆者は、一般の社会道徳をとりあえず無批判に採用し、それを堅持すれば、最適かどうかはともかく、森の中で（社会の中で）道に迷い続けることはないとするのである。

しかし、問5での反論（解答例2）で述べたように、他者の権威にしたがうという「方向」の取り方は、はたして同じ方向としての実質を持つかどうか疑問が残る。「もっとも分別のある人の意見」と言っても、いったい誰がいかなる根拠で「もっとも分別ある人」と判断できるのかについて、議論の余地があろう。それが誰であれ、ただ盲目的に他人にしたがうというのでは、占いやサイコロと大差ないのではないか？

すべて自分の考えだけで行動するよりは、多くの人々の意見を参考にした方がよいと言えるとしても、他人の意見が参考になるのは、それを鵜呑みにせず、批判的吟味をすることができる主体に取ってのみではないだろうか？ されば、不確実性の中で行動するとき必要なのは、何らかの権威に盲従することではなく、批判的吟味的能力を持ったできるだけ多数の人々の自由な意見交換が保証されることなのである。

出題意図

文章を正確に読解すると同時に、その文章で主張された理屈を自家薬籠中のツールとして自在に使いこなす能力を要求しています。その上で、与えられた文章の暗黙の前提を見出し、それをもとにその文章を批判する議論を論理的に展開できるような、構想力と表現力を問います。

そのため、第1問では、デカルトの提案する格率の背景をなす事情を問うています。文章Aは、社会的倫理についてのものであり、Bは問題状況からの脱出に関するものであり、それぞれ独立したものと見ることもできますが、そこに共通する前提があるとも考えることもできます。それは、不確実な状況で意思決定せねばならないということであり、またおのれが採用している原則や方法について常に自覚的であるべきだ、ということでもあります。しかし、デカルトの引用文の全体、特に初めの部分を読めば、格率を定める動機がかなりはっきりと述べられているのがわかります。たとえば、「理性が私に対して判断において非決定であれと命ずる間も、私の行動においては非決定の状態にとどまるようなことをなくするため」と述べられています。ここから、前提となっている状況とは、理性によって確実な根拠をもって判断できないにもかかわらず、何らかの決断を下さざるを得ない状況であることがわかります。

問2の(i)は、相手の行動を、彼自身が採用している格率との不整合をつくことで批判することを要求する問題であり、(ii)は、同じ確率を使用して、逆の立場を正当化することを要求する問題です。結論にとらわれず、提案された原則を駆使して議論を組み立てる柔軟な応用力を試しています。

問3、4は、いずれも「森」の比喻をめぐって、本文の正確な読解を問いつつ、その議論の隠れた前提を問題にしています。ここで「森」を問題一般、課題一般の比喻と解するなら、「森」をめぐる議論は、広く学問的探求の問題と関連付けることができるはずですが。つまり、デカルトの本文がもつばら社会道徳(いわゆる「暫定的道徳」)に関心を集中しているのに対して、少し違った文脈においてこの比喻を理解することもできるわけです。そしてそれこそは、これから大学で学問探求を志す者にとって、当然ある程度関心を持っていることが期待される話題の一つでしょう。

さて、そうしてみると、方法の一貫性ということをめぐって、デカルトの思考が暗黙のまま前提していながら、主題的には論じていない事柄があることがわかります。これが、問4で問われている「暗黙の諸条件」です。ここで、単にひとつの前提を上げるのではなく、いくつもの条件を求めるのは、この「森の比喻」が決して自明なものではないことに気づいてもらい、その含意について多角的に考察を深める手助けにしてもらうためです。それは、以下の問題を考えるヒントになるはずですが。

問5、6は、その「暗黙の諸条件」の成立を疑い、それらが成立しない可能性を想定することから、デカルトの格率1、2のそれぞれに対する反論を試みることを求めています。

与えられた主張をただ受動的に正確に理解するだけでなく、その主張の制約条件を明確化するところから、その主張の持つ射程と限界を同時に理解し、それとは別の理論的可能性を構想する批評的・能動的読解を求めています。

とくに問5，6においては、一通りの正解を言い当てることが求められているわけではなく、論理的一貫性・表現の明晰性を備えた論述を、自分なりに構成することが求められます。